印度學佛教學研究第 54 巻第 2 号　平成 18 年 3 月

Pāli *thīna-middha-*「惛沈・睡眠」, Amg. *thīṇagiddhi-/ thīṇaddhi-* と Vedic *mardh/mṛdh*

阪 本（後 藤）純 子



Pāli *thīna-middha-*「惛沈・睡眠」, Amg. *thīṇagiddhi-/thīṇaddhi-* と Vedic *mardh/mr̥dh*

阪 本（後 藤）純 子

1. 仏教やジャイナ教の術語が，広く使われ，翻訳が定着しているにもかかわらず，正確な語義や語源が判らないという現象は珍しくない．その場合，中期インド語の出発点である Veda 語形の検討が問題解決の糸口を与えることがある．

Pāli *thīna-middha-*, BHS *styāna-middha-*（中性単数）は，2 つの中性名詞 *thīna-/styāna-* と *middha-* の Dvandva 複合語と見なされ，伝統的に前肢は「精神的に沈鬱で不活発・無気力な状態」，漢訳「惛沈」Tib. *rmugs pa* 'languor'，後肢は「倦怠感，特に眠気・居眠り」，漢訳「睡眠」Tib. *gnid* 'sleep' とされる．この語は Ardhamāgadhī の *thīṇagiddhi-*, *thīṇaddhi-*, Jaina-Skt. *styāna-gr̥ddhi-*, *styāna-rddhi-* に対応するが，ジャイナ教では一語全体として特殊な睡眠状態を意味する．

仏教・ジャイナ教ともに *thīna-/thīṇa-* を *styāna-* と Skt. 化するが，本来の Skt. *styāna-* とは意味も語形も異なり，単純に同一視できない（→ 2., 3.1.–3.3.）.

middha- の語源に関しては従来様々な見解が示されたが，近年は以下の EDGERTON の説（NIA 2, 1939, 607–610; BHSD s.v. *styāna-middha*）が一般に支持されている：「仏教・ジャイナ教の諸形はすべて仏典成立以前の古い複合語 **styāna-* + *r̥ddhi-/r̥ddha-* "increase of languor" [= Jaina Skt. *styānarddhi-*] > **thīna-iddhi-/iddha-* に由来する；母音連続の回避のため，後肢語頭母音脱落により Amg. *thīṇaddhi-* が，Sandhi-Consonant *m* の挿入により Pāli *thīnamiddha-* が成立；Amg. *thīṇagiddhi-* は *giddhi-*「貪欲」への連想から *g* が挿入され，*styāna-gr̥ddhi-* と二次解釈された；Pāli では誤解により *middha-* という単語が抽出され用いられたが，人工語 *middha-* には固有の意味が無く *thīna-* と同義である」．EDGERTON 説は語形のみを機械的かつ共時的に同一次元で比較し，一見合理的であるが現実の文献の検討結果と矛盾し，容認し難い：1）Pāli 聖典古層 Gāthā から *middha-* および派生語 *middhin-* は単独語として一貫して *thīna-* とは異なる意味で現れる；複合語 *thīna-middha-* の成立は明らかにその後である；2）Amg. *thīṇagiddhi-/thīṇaddhi-* の用例は Jaina 聖典新層の「見障業」の列挙中に限られ，Pāli *middha-* よりはるかに新しい上に，EDGERTON 説の基盤となる

アートマンを護っている勇者は，諸々の欲望によって放逸となることなく，諸々の悪業を留めた．

Āyār. I, 8, 2, 4(p.34, I, 30):

goyarassa aṇupuvveṇaṃ sammaṃ paḍilehāe āya-gutte.

[修行者は] アートマンを護って，対象を順次に正しく（気をつけて）観察すべし．

[XI.] Dhammapada 418a: Āyāraṅga-sutta, I, 2, 6, 3(p.12, 1. 11)

hitvā ratiñ ca aratiñ ca

〈快楽〉と〈不快〉とを捨て，

という表現に対しジャイナ教では，

Āyāraṅga-sutta, I, 2, 6, 3(p.12, 1. 11)

nâraiṃ sahae vīre, vīre no sahae ratiṃ

勇者は，不快に堪えず，また快をも耐えず

see: Āyār. I, 3, 1, 2(p.13, 1. 16)

sīôsiṇa-ccāī se nigganthe arai-rai-sahe pharusiyaṃ no veei.

寒・暑を捨てたニガンタは不快・快に堪え，感触を感じない．

以上．

〈キーワード〉 Dhammapada, Āyāraṅga

（前大正大学非常勤講師）

掲載されなかった諸氏の発表題目（3）

Godāna 儀礼と vedavrata

梶原　三恵子（京都大学非常勤講師）

無自性論証と経典の権威
——Kamaraśīla の経典採用方法について——

計良　龍成（鶴見大学）

styāna-rddhi- > *thīṇaddhi-* は少数派で, *thīṇagiddhi-* が一般的である.

Pa. *middha-* は音韻的にも語義的にも Ved. *mṛdhrá-* および *mṛddhá-* によく対応し, ここに起源を求めるべきであろう[1]. この見解は既に Fs. DELEU, 1993, 302 n.22 に示したが, 新たに当該語と語根 *mardh/mṛdh* 及び *styā/stī* の全語形を検討した結果を要約する[2]. 具体例は Fs. Klingenschmitt（印刷中）を参照されたい.

2. 語根 *styā/stī* は「流動性・柔軟性を失う：1. 固まる, 凝固する；2. 停滞する, 動かない」を意味し, 動詞・派生語ともにほとんど Veda 文献の特定の表現に限定されるが, 古典 Skt. では *styāna-* 形容詞「固まった, 停滞した」が医学文献に頻出し, 軟膏, 血液, 腫れ物, 皮膚病, *sarpis-* の丸薬, *kapha-/śleṣman-*（体内の水的要素), 心臓, *dadhi-*, *vāyu-/vāta-*（体内の気体要素）等を修飾する. Patañjali Mahābhāṣya I 246 = II 198 では胎児の「凝固」を意味する中性名詞として現れる.

3. Pali *thīna-*/BHS *styāna-*「精神機能の凝固・停滞, 精神的沈滞・不活性, 鬱状態」

3.1. Pāli 聖典では意味が精神機能（*citta-*）に限定され, *jhāna-*（*dhyāna-*)「禅定」に関係する. 1 例を除き中性実体詞化し, 最古層の Gāthā に残る（S I 126,28 [E2: 277,9] 形容詞〜 Mvu III 284,5 G.pl.f. *thīnaṃ* → 3.4., Sn 942a [Aṭṭhakavagga], Sn 1106c [Pārāyanavagga], Sn 483d [Sundarika-Bharadvāja-Sutta]). 知覚・感受・思考等の精神機能（*citta-*）は, 柔軟で流動性をもつからこそ自由・闊達に働き, *jhāna-* を可能にする. *citta-* が凝り固まって重く沈み, 停滞すれば, 知覚が鈍麻し, 感情が暗く沈み, 思考が働かず, *jhāna-* に不適な状態となる. これが *thīna-*「惛沈」であり, *citta-* を覆い隠し活動を妨げる（*nīvaraṇa-*).「*citta-* の凝固・停滞が精神活動の障害をもたらす」という考え方は, 凝固・停滞した（*styāna-*）体内の *kapha-/śleṣman-* や *vāyu-/vāta-* が病的状態を引き起こすという医学的見解（→ 2.）と共通する.

3.2. **動詞 *pati-ṭṭhīya-*[ti]/*pati-tthīya-*[ti]（< **prati-styīya-*[te]）「反感・敵意に凝り固まる」**:Pāli 聖典散文において怒り等の不快な感情を表す定型表現に現れる.

3.3. *styāna-* と *thīna-/thīṇa-* は音韻的に直接結びつかない：*styāna-* > **cchāna-*, 同様に *styāya-*[te] > * (-)*cchāya-*[ti]；MI. 語形は語根の弱階梯 *stī* に基づく：**stīna-*（→ 3.4.: BHS に 1 例）> *thīna-*, **stīya-* > (-)*tthīya-*（cf. BERGER Zwei Probleme 78). この現象は単なる Saṃprasāraṇa（EDGERTON BHSG §3.115; K.R.NORMAN JRAS 1958, 46）として片づけられない（cf. 筆者 : Panales of the VIIth World Sanskrit Conference [Leiden 1987] vol. VI-VII, 1991, 14f.). そもそも Skt. *styāna-* が語根の標準階梯 + *-na-*Suffix による過去分詞か, *-ana-*Suffix による中性実体詞か不明であり（→ 2.), MI. *thīna-/thīṇa-* が, 過去分詞として本来期待される歴史的語形（弱階梯 + *-ná-*）の継承か, 或いは類推等による

二次的形成か，決定しがたい．H. SMITH の想定する類推形成（Sadd 1430 s.v. *thīna*: **stīna :: styāna = śīna :: śyāna = jīna :: jyāna*）はほとんど用例のない語に基づき現実的でない（*śīná-* YV^m に 1 例，*jyā́na-* AV(P) と ŚB に 2 例，他は文法書のみ）．OI. と MI. で異なる語根階梯の問題は改めて検討する必要がある．Cf. *dhmā* (*dhámati*) : OI. *dhmātá-* < **dhmeH-tó-* :: MI. *dhanta-* < **dhāntá-* < **dhm̥H-tó-*（筆者 Fs.Hoffmann I = MSS 44, 1985, 183f.）; *vā/ū* (*vā́yati*)「消滅する」: 過去分詞（形容詞化）*ūná-*「欠如している」，名詞 *nirvāṇa-*（標準階梯 + *-ana-*）「完全な消滅，涅槃」を過去分詞に転用（K. HOFFMANN Aufs II 466f. n.3）．

3.4. **BHS nt.sg. *styāna-/stīna-***：Mvu III 284,5（～ S I 126,28 → 3.1.adj.）*thīnaṃ* は G.pl. f.*thī-* < *strī-*「女達の」であり，nt. *thīna-*（BHSD・BHSG, JONES Mvu 訳）ではない．SaddhPuṇḍ の中央アジア写本（Ed. TODA p.159 [322b 2]）は恐らく *thīna-* から復元された *stīna-* を示す（BHSD は誤って複合語として採録）．

4. **Pāli/BHS *middha-* nt.sg.**「眠気，居眠り」: 古い成立を示唆する古 Āryā の Gāthā に現れる : Sn 151 = Khp IX 9 (cf. ALSDORF 257f.) *tiṭṭhaṃ caraṃ nisinno vā* ¹ *sayāno* [*vā*] *yāvat' assa* (**yāvatā*) *vigatamiddho* | *etaṃ satiṃ adhiṭṭheyya* ¹ *brahmam etaṃ vihāram idha-m-āhu* ||「立っていても，歩き回っていても，あるいは座っていても，横たわっていても，眠気から離れている限り，この（慈愛の）意識を保持すべし．この生き方がこの世におけるブラフマンである[3]と［人々は］言っている」．また派生形容詞 *middhin-*「眠気・居眠りにより特徴づけられた，常に眠気・居眠りを示す」が Pāli と BHS に共通する古層 Gāthā に残る : Dhp 325（Netti に引用）*middhī yadā hoti mahagghaso ca* ¹ *niddāyitā samparivattasāyī* | *mahāvarāho va nivāpapuṭṭho* ¹ *punappunaṃ gabbhaṃ upeti mando* ||「まき散らされた餌で太らされた猪（野生豚）のように，大食していつも眠たがり，うたた寝ばかりして，ごろごろ転がって寝ている（正しい姿勢で寝ない）習慣になる場合には，愚鈍な者として繰り返し繰り返し母胎へと近づく（再生する）．」～ Udānav XXIX 13．*middha-* は特に禅定に関して用いられる．修行生活では，原則として，夜を三分したうちの中夜のみ，右脇腹を下に，足を足の上に重ねる姿勢で横臥して眠り，初夜と後夜は起きて禅定をする；眠気に耐えられない場合は，定められた場で繰り返し歩く（*caṃkama-* < *caṅkrama-*「経行」）．慢性的な睡眠不足により特に初夜と後夜の座禅中の眠気に悩まされた様子が窺える（→ 5.1.）: Th 271 *ahaṃ middhena pakato* ¹ *vihārā upanikkhamiṃ* | *caṅkamaṃ abhirūhanto* ¹ *tath' eva papatiṃ chamā* ||「私は（座禅中に）眠気に突き動かされて僧院から歩み出た．*caṅkama* へと登りつつ，まさしくそのまま大地に倒れた」．出家修行者の本来のあり方を保持する *dhutaṅga-*「頭陀行」の *nesajjika-*「常座不臥の実践者」は一切横臥して眠らず，常に座して瞑想するが，より深刻な状況に直面したであろう：Th 904

pancapannāsa vassāni ¦ *yato nesajjiko ahaṃ* | *pancavīsati vassāni* ¦ *yato middhaṃ samūhataṃ* ‖「私が常座不臥者となってから55年間である．［私から］眠気・居眠りが完全に取り除かれてから25年間である」．

5. Pāli *thīna-middha-*, BHS *styāna-middha-* nt.sg.「精神的沈滞と眠気・居眠り」

5.1. Pāli Gāthā では1例のみ（Sn 437a：Namuci の5番目の軍隊）．散文経典では種々の「悪い属性」の列挙中に現れ，特に *nīvaraṇa-*「（精神機能を）覆い包んで真理を悟ることを妨害するもの」（5～10項目，「五蓋」）の一つとされる．Abhidhamma 以降は *thīna-* と *middha-* に分解し各々を類型的表現で解説する例が多い：Dhs 204f.（No.1152-1157）No.1156 [*thīna-* の定義] *yā cittassa akalyatā akammannatā olīyanā*...「精神機能が良くない状態であること，行為（修行 / 禅定）に不適であること（→ 3.1.），落ち込んでいること…」；No.1157 [*middha-* の定義] *yā kāyassa akalyatā akammannatā*...*soppaṃ pacalāyikā*...「身体が良くない状態であること，行為（修行 / 禅定）に不適であること… 睡眠，居眠り…」；注釈 As では：*thīnan ti sappi-piṇḍo viya ghaṇa-bhāvena ṭhitaṃ.*「*thīna-* とは *sarpis-* の団子のように固まった状態により停止している．」...*medhatī* (v.l. *metī*) *ti middhaṃ*「***medhati*** (Sadd 395,5: = ***hiṃsati***)『損傷する』ので ***middha-*** である．」...*yaṃ yebhuyyena sekha-puthujjanānaṃ niddāya pubbabhāga-aparabhāgesu uppajjati*...「大部分は修行中の凡人達に眠りにより初夜と後夜に生じる［= *thīna-middha-nīvaraṇa-*］（→ 4.）．」

5.2. BHS nt.sg. ***styāna-middha-***：時代と共に本来の語義・語形の伝承が失われ，語形の崩れと共に，単なる「居眠り」の意味に転化する（Gaṇḍavyūha [Gv] 20,10）．

6. Amg ***thīṇagiddhi-, thīṇaddhi-*** (Jaina-Skt. ***styānagṛddhi-, styānarddhi-***) は「見障業」（*darśanāvaraṇīya- karmaṇ-*）の列挙において睡眠に関わる5項目の一つとして現れる（Uttarajjhāyā, Thāṇaṃga, Samavāyaṃga, Aṇuogaddāra, Paṇṇavaṇā 等白衣派聖典新層；裸形派代用聖典 Mūlācāra 等）．白衣派と裸形派とでは列挙の順序が異なり，業論の形成に重要な役割を果たした Viyāhapaṇṇatti に現れない事は，この語が非常に遅い段階で Jaina 経典に導入された可能性を示唆する（河崎豊氏の御教示による）．睡眠状態の一種であることは明白であるが，具体的な内容は聖典からは定め難い．一般に *niddā-*「通常の睡眠」，*niddāniddā-*「深い睡眠」，*payalā-*「座った状態での眠り」，*payalāpayalā-*「歩行中の眠り」，*thīṇagiddhi-/thīṇaddhi-*「睡眠中の様々な行動」とされる．これらの語は Pāli *middha-* の類義語 *niddā-*「睡眠，うたた寝」，*pacalāyikā-*「眠気による瞬き，こっくり，居眠り」と共通し，一まとめに Jaina 教に取り入れられた可能性が強い（→ 8.）．

7. ved. ***mṛdhrá-, mṛddhá-***: 語根 *mardh/mṛdh* の語義の中核は「疲労による活動力・

能力・効力の衰退」であるが，Aktionsart (momentativ/durativ) は確定しがたい．pres. *márdh-a-*[ti] fientiv/intr. 1.「衰弱する，倦み疲れる」，2.「怠惰・無精・無関心・不活発になる / である」，3.「無力・無能・無効力になる / である」；4. trans. (+ acc.)「(〜に対し) 怠惰・無関心である；(〜を) 怠る，なおざりにする，無視・放置する」．［従来の見解は trans.「侮蔑する，無視する，見捨てる，怠る」を主とする傾向が強い：GRASSMANN, GELDNER, T. GOTŌ, MAYRHOFER, LIV 等.］派生語も含めて，常に否定的な意味で用いられる．定動詞と現在分詞はすべて否定辞（*ná, nahí, nákir, mā́, á-*）を伴い，派生語も否定辞 *á-* との複合語が多い．

7.1.　*mṛdhrá-* nt. (sg./pl.)「疲労（眠気・不活発），能力・効力の衰退」 (1) RV VIII 43,26 *ghnán mṛ́dhrā́ṇy ápa dvíṣo* ¹ *dáhan rákṣāṃsi viśvāhā* | *ágne tigména dīdihi* ‖「疲労（眠気）達を打ち払い，憎しみ達を［打ち払い］，障害たちを，あらゆる場合に焼き滅ぼしつつ，Agni よ，鋭い［炎］により輝け」；(2) RV VIII 44,30 *purā́ gne duritébhyaḥ* ¹ *purā́ mṛdhrébhyaḥ kave* | *prá ṇa ā́yur vaso tira* ‖「困窮（苦境）達の前に，アグニよ，疲労達の前に，詩人（見者）よ，我々の寿命を，良き［神］よ，全うさせよ」；(3) TS[m] I 3,13,2［Agiṣṭoma；水汲み儀礼］*kā́rṣir asi ápāpā́m mṛdhrám*「君（Darbha 草）は畝を引く者だ．水たちの疲労（能力・効力の衰退）を［引き］除け」（TS[p] VI 4,3,4: *mṛdhrám* を *śámalam*「汚れ」で置換）．永遠に世界を循環する不滅・不死の水たちの疲労を除去し，その浄化能力を活性化する儀礼と推測される．RV IX Soma Pavamāna の *mṛ́dh-*（Acc.Pl.）「(圧搾による) 疲労ないし効力減退，具体的には不純物（？)」の除去（6 例）に基づくかと推測される．

7.2.　adj.「疲労衰弱する；疲労により活動力・能力・効力・意欲が衰退した，性的に不能な，なおざり・怠惰・無関心・不活発な」

(1) ***mṛdhrátara-***（比較級）：MS[p] IV 1,12:15,15 ***níṣṭejā*** *asya* ***nírvīryo*** *bhrā́tṛvyo jāyate.* *'tho* ***mṛdhrátara*** *evá bhavati.*「彼の競争相手はエネルギーを欠き，活動力を欠いて生まれる．しかも，まさしく，より怠惰（不活発）となる」．***mṛdhrá-*** が ***téjas-*** や ***vīrya-*** の欠乏と類似の意味を持つ．

(2) ***á-mṛdhra-***：RV 8 例（Indra 3, Agni, Soma Pavamāna, Marut 達 , Uṣas, Dyāvā-Pṛthivī 各 1），TB[m] II 8,2,2, ŚB (M) XI 1,6,31．性的能力に関する用例には動詞の意味がより明瞭に現れる（→ 2. *styā/stī*：*viṣṭīma-* “penis erectus”, *viṣṭīmin-*）．i) RV V 43,13 *ā́ dharṇasír bṛhád-divo rárāṇo* | *víśvebhir gantv ómabhir huvānáḥ* | *gnā́ vásāna óṣadhīr* ***ámṛ́dhras*** | *tridhā́tuśṛ́ṅgo vṛ́ṣabhó vayodhā́ḥ* ‖「持続力あり，高い天に在り，自らのものを与える［Agni］は，［我々に］呼ばれるならば，あらゆる援助者たち（神々）と共に，こちらへ来い，神々の妃たちである植物たちを身に纏い，(性的に) 疲れること無い，3 層の角（cf. 次例 ***trī́ṇi śiśnā́ni***）を持つ種

牛，生命力を授ける [Agni] は」; **ii)** ŚB (M) XI 1,6,31 (～ ŚB (K) III 1,12,27 ***ámr̥ddham*** → 7.3.) ***trī́ṇi śiśnā́ni.*** | *tá evá tráyo 'nuyājā́ḥ. sá yò 'yáṃ várṣiṣṭho 'nuyājás tád idáṃ várṣiṣṭham iva śiśnáṃ. táṃ vā́ ánavānan yajed íty āhus. tátho hāsyaitád* ***ámr̥dhram*** *bhavatī́ti.*‖「3 つの男性器 (*śiśná-* 'penis' ; elliptic pl.) [がある]．3 つの *anuyājá-*（祭式終了時の付属的献供）はそれらに他ならない．その [うち]，この最も高い（上位の）*anuyājá-* であるもの，それはこの，ちょうど最も高い *śiśná-* である．その [*anuyājá-*] を息を継がずに祭るべきである，と人々は言う．そのようにして，また，彼（祭主）のこれ (*śiśná-*) は不能にならない，と [人々は言う]」．

(3) ***mr̥dhrá-vāc-*** **「なおざりな，効力のない言葉を話す（者)」（異民族・異部族の敵対者への蔑称）** RV 5 例 : V 29,10 (*dásyu-*; + *anā́s-*「口の無い，無口な，まともに言葉を話せない」), VII 6,3 (Paṇi 達), VII 18,13 (十王戦争の敵 Pūru), I 174,2 (敵の諸部族), X 23,5 (Indra が *vā́c-*「(正しい) 言葉」により *ví-vāc-*「バラバラな言葉を話す（者)」で *mr̥dhrá-vāc-* な者達を打ち倒す)．正確に発語された実現力を持つ言葉 (*bráhman-*) は神々を動かし勝利をもたらすが，不正確な言葉は効力を持たないという観念が背景にある．

7.3.　過去分詞 ***mr̥ddhá-*** **「(性的に) 不能な，怠惰・不活発な」** Br. に 3 例 : (1) ŚB (K) III 1,12,27 ***ámr̥ddham*** ～上記 ŚB (M) XI 1,6,31 ***ámr̥dhram***; (2) Deva 達の ***vīryàvant-*** と Asura 達の ***mr̥ddhá-*** の対比 : MS[p] I 9,3:132,16f. *dákṣiṇena hástena devā́n asr̥jata savyénā́surāṁs. té devā́* ***vīryàvantó*** *'bhavan* ***mr̥ddhā́*** *ásurāḥ.*「[Prajāpati は] 右手で Deva 達を [自身から] 放出した（創造した)，左手で Asura 達を．それら Deva 達は雄々しい行動力を備えた者となった，Asura 達は怠惰な（不活発な）者と [なった]．」～ KS[p] IX 11:112,18-20.

8.　結論　(1) Pa. (= BHS) *middha-*「眠気・居眠り」は音韻的にも語義的にも Ved. *mr̥dhrá-* ないし *mr̥ddhá-* の発展上に位置する[4]．中性名詞・形容詞として RV から用いられた *mr̥dhrá-* > MI. *middha-* に，遅れて現れ用例も少ない過去分詞 *mr̥ddhá-* > *middha-* が合流して，Pāli *middha-* が成立したと考えられる．**(2)** Ved. *mr̥dhrá-/mr̥ddhá-*「怠惰・不活発な」が MS/KS で *vīryà-*「雄々しさ，男性的活動力」の反対概念として用いられる点も仏教と共通する (→ 7.2. (1) *mr̥dhrátara-* ～ *níṣṭejas-*; 7.3. (2) *mr̥ddhá-* :: *vīryàvant-*)．仏教の修行の特徴は苦行と享楽の両極端を離れた中道の実践にあり，その中核は *jhāna-/dhyāna-*「禅定」である．*viriya-/vīrya-*「精進」は第 4 *pāramitā-*「波羅密多」として第 5 の「禅定」の前段階に位置するが，*middha-* は禅定の妨げとして精進の対極にある．比丘（尼）たちは慢性的な睡眠不足の状態にあり，特に禅定の間「疲労による眠気，居眠り」に悩まされたため，*middha-* の意義が「疲労による活動力の衰退，怠惰」から「眠気，居眠り」に転化・固定

されたと考えられる．他方，Skt. *styāna-*「凝固・停滞した」に対応する *thīna-* も精神機能 *citta-* に限定され，「精神的沈滞，不活性，鬱状態」の意味で特に禅定に関して用いられる．本来は語根 *styā/stī*「堅くなる」と *mardh/mṛdh*「疲れてぐったりする（柔らかくなる）」とは反対方向の意味を担う（性的表現に端的に表れる）．Pāli 経典古層，特に Gāthā では *thīna-* と *middha-/middhin-* とは区別されて単独に現れるが，前者は精神の不適性（*akammannatā-*），後者は身体の不適性として，修行・禅定の障害という共通点で合体し，複合語 *thīna-middha-* を形成する．(3) BHS では *styāna-middha-* に Skt. 化されるが，時代が下るにつれて複合語の意味が「居眠り」の意味に収斂されると共に，正確な語形の伝承も失われ，特に後肢 *middha-* の語頭子音が崩れてゆく．恐らくこの時代に，解脱の障害となる睡眠状態を表す術語として *thīna-middha-* が類義語 *niddā-, pacalāyikā-* と共に，仏教から Jaina 教に導入され，変形・増広されて「見障業」中の５項目を構成するに至ったと推測される．その際に (*thīna*) *middha-* の語義「座りながら，歩きながらの居眠り」(→ 4.) が *payalā-*（*pacalā-*）と *payalā-payalā*（*pacalāpacalā-*）に割り当てられた結果，*thīna-middha-* の対応語には「脳は睡眠状態にありながら身体的には活動している状態」という意味から「睡眠中の行動」という奇妙な再解釈が与えられたと考えられる．(4) *thīṇa* (*/styāna-*) *middha-* は語形伝承の崩れ（Gv *styānaviddha-* 等）から再解釈を被り，一方では（恐らく *giddhi-*「貪欲」，更に *strī-* > *thī-/ṭhī-*「女」gen. pl. *thīnaṃ* の連想から）*thīṇagiddhi-/styāna-gṛddhi-* に，他方では *thīṇaddhi-/styāna-rddhi-* に改変されたと推測される．

---

1)　Fausbøll (Suttanipāta Glossary, 1894, 279; 285) は *middha-* を *mṛdh* = *midh/medh* (=*hiṃsati* → 5.1. 末) に帰するが，*middha-* の語源の正確な理解には至らなかった．

2)　用例調査に関し Pāli 聖典では林隆嗣氏に，Jaina 文献では河崎豊氏に，医学文献では山下勤氏に御助力いただき，深く感謝する．

3)　Pj I (Khp-a) 250, 25ff. は *brahmam vihāram* を *brahmavihāram*「梵住」の split compound として解説．

4)　*ṛ* > *i* の変化に関しては，*gṛ́dhra-* > adj. *giddha-*「貪欲な」，m. *gaddha-*「禿鷹」; *mṛgá-* > *miga-*「鹿」，*maga-*「野生獣」; *tṛ́ṇa-* > *tiṇa-*「草」; *ṛṇá-* > *iṇa-*「負債」等参照．

〈キーワード〉 thīna-middha-, styāna-middha-, thīṇagiddhi-, thīṇaddhi-, styānagṛddhi-, styānarddhi-, nīvaraṇa-, mṛdhrá-, mṛddhá-, styānā-, 惛沈, 睡眠, 五蓋, 見障業

（パリ第３大学課程博士，元大阪市立大学助教授）